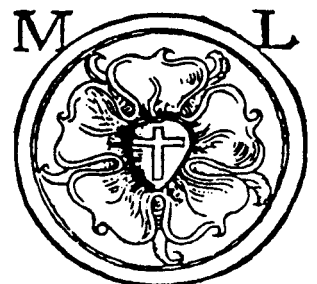


ルター 新聞

Die Luther Zeitungs

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所二ニュース・Nr.77



ルターと聖餐

コロナの時代の中で 考える



選帝侯にブドウ酒を配餐するルター
(16世紀の木版画)

どうやら、残念ながら、いきなりゼロ・コロナにはならないようだ。ウィズ・コロナからゼロ・コロナへ。まだまだもう少ししばらく緊張の時がつづく……。

しかし考えてみれば、キリスト教は、こうした身も引き締まる緊張を生きてきた。終末をめざす生き方である。すでにキリストより与えられている「救いの約束」と、その「成就（終末!）」の中間時を生きる。

さて、礼拝とは、そうした約束の時であり、それ故まさに中間時の業である。礼拝。身も引き締まる時。そこで改めて考えるべきは、礼拝の中心である「説教」と「聖餐」である（説教については、前号（七六号）参照）。

今号では、聖書に学びつつ、ルターとともに「聖餐」について考えてみよう。
(え)

今号の内容

- 2面 聖餐とは何か
↳ ルターと共に考える
- 3面 聖餐についての基礎知識
- 4面 シリーズ「人間ルター」^⑮
↳ 楽器を奏でる人ルター
新刊案内 金子晴勇
「宗教改革的認識とは何か」
- 5面 ルターの名著
「マグニフィカート」
新刊案内 江藤直純
「ルターの心を生きる」
- 6面 シリーズ
「ルターとバッハとわたし」
- 7面 ルターのことば
切手に見るルター^⑳
- 8面 牧師のためのルターセミナー報告
研究所二ニュース^㉑
(案内)
ルター研究所クリスマス講演会

聖餐とは何か ルターと共に考える

所長 立山 忠浩

新型コロナウイルス感染の及ぼす影響が計り知れない。多くの教会が主日礼拝の様式を変えることを余儀なくされた。聖餐式も同様である。オンラインの礼拝に切り替えた教会でも説教は聞くことはできても、聖餐式だけはどうしても困難さが伴っている。ただ、このような状況だからこそのように礼拝を行い、そしてパンとぶどう酒に与えることに拘っている教会も多々あると聞く。確かにそのような聖餐の捉え方がある。

マルティン・ルターは聖餐についてこう述べている。「罪と死の恐怖、肉と悪魔との誘惑のために苦しみ悩む者がこれ（聖餐）を求めるのである。もし重荷を負って、しかも自分の弱さを感じるのであれば、喜んで礼典（聖餐）に赴き、元氣と慰めと力を授けられよ」（『大教理問答』聖壇の聖礼典）と。この言葉は、今のこんな状況だからこそ聖餐に与るべきだという励ましに聞こえてくる。

である。英語ではリアルプレゼンス（ドイツ語ではリアルプレゼンツ）と言うが、キリストがパンとぶどう酒にリアルに現在（臨在）することを適切に表現した言葉である。それゆえに、悪魔的なウイルスが私たちの日常を取り囲んでいる時にこそ、聖餐に与ることで、キリストが自分の中にリアルにいてくださることを、リアルに体験することは極めて意義深いと言えよう。それが元氣と慰めと力を与えるからである。

ただ、ここで私たちが確認しなければならぬことがある。キリストの現在に聖餐に与るときだけに起こるのかという問いである。ルターの残した湖上の舟の説教がある。嵐の湖上の舟で死の恐怖に脅える弟子たちの話だが、その舟にはイエスが眠っている（マタイ八・二四）。ルターは「信仰とはキリストがおいでになる舟である」と言う。周りを荒波と暗黒が取り囲んでいる舟であっても、そこにはキリストが現在することを信じる大切さを説いている。舟とは教会であり、私たち自身のことであることは言うまでもない。さらに重要なことは、眠るイエスを弟子たちが目覚めさせたことを

ルターが語っていることである。嵐の猛威に右往左往するだけで、自分たちの舟にはキリストが眠っていることになかなか気づかなかつたのである。私たちもこれと似ていないだろうか。パウロの「あなたがたは自分自身のことから知らないのですか。イエス・キリストがあなたがたの内におられることが」（Ⅱコリント一三・五）という言葉は、まさに嵐の中の弟子たちだけでなく、今日の私たちに語りかけているように思えてならない。

キリストの現在に聖餐によつてのみ実現するのではない。ただ、他のこと

に目を奪われているときに、私たちはキリストの現在をどうしても見失いがちである。聖餐はそれに気づかせ、目覚めさせ働きを担うのである。しかしキリストの現在を気づかせるのは聖餐だけではない。聖書の御言葉そのものがそうであり、礼拝の説教がその役目を担っている。もし聖餐に与れないとしても、説教がキリストのリアルな現在に気づかせるという本来の使命を果たすなら、それで十分であろう。

（JELC 都南教会牧師）



JELC 発行『堅信と小児陪餐』表紙より

聖餐についての基礎知識

サクラメントとは？

礼拝において最も大切なことは、「説教」と「聖餐」です。聖餐は、神学の世界では、洗礼とともに「サクラメント」と呼ばれています。

さて、サクラメントとは、人の目にはいわば隠された神秘的な神の恵み（救い）が、見える形で、つまり物質となってもたらされる儀式のことです。カトリックでは秘跡、プロテスタントでは聖礼典と訳されています。

五世紀の神学者アウグスティヌスは、サクラメントを「目に見えない恵みの見える様式」と定義し、更にルターも『大教理問答書』で引用しましたが、「神の言葉（注・人を救う神の心）に物質が加わるとサクラメントになる」と言いました。確かに洗礼の「水」も聖餐の「パンとブドウ酒」も、目に見える物質です。そして物質とは、神の創造物なのです。

なお、カトリックではサクラメントは七つ（洗礼、聖餐、堅信、告解、婚姻、叙階、死者病者への塗油）ですが、ルターは聖書の記述に基づいて二つ（洗礼、聖餐）にしました。

聖餐の由来と意味

聖餐は「最後の晩餐」に由来すると言

われています。二カ所、聖書から引用します（新共同訳）。

《一回が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。……》（マルコ福音書一四・二二～二四）。

《わたし〔注・パウロ〕があなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。》（第一コリント一・二三～二五）。

さて、これらの聖句から、聖餐の意味がわかります。五点あります。

①パンとブドウ酒は、キリストの体と血である。

②その体と血は、キリストの、人々の罪のゆるしのために十字架で砕かれた体、流された血である。つまり、聖餐は罪のゆるしの食事である。

③しかもブドウ酒は、復活（究極の救い）の「契約の血」でもある。つまり、聖餐は「神の国（天国）」での食事の先取りでもある。

④それゆえ、こうした食事をキリストを覚え記念（アナムネーシス）して行う。⑤しかも一人ではなく、みんなと共に行うのである。聖餐は人々を一つにする。

パンとブドウ酒（理解のちがひ）

パンとブドウ酒をどう理解するかについては、教派によって微妙なちがひがあります（聖餐論争と言われています）。

①カトリックは、パン（ブドウ酒）がキリストの体（血）に実体的に変化したと理解しています。つまり、聖餐のパンは、もはやパンでなく、キリストの体そのものののです。（化体説）。

②それに対し、ルターは、パン（ブドウ酒）はパンであるが同時にキリストの体（血）でもあると理解しました（共に在説）。

③後に改革派に合流しますが、ツ빙ングリは、「マールブルク会談」でルターと論争し、パン（ブドウ酒）はキリストの体の「しるし」と主張しました

（象徴説）。

④カルヴァン（改革派）は、聖餐のそのとき、信徒は霊的に天へと招かれ天国でキリストと共に食事をしていると理解しました（ヴァーチャリズム）。

ルター（派）について、もう少し補足します。ルターはツ빙ングリと論争した際に、聖書に記されたキリストの言葉に基づいて、パン（ブドウ酒）は文字通り身体的にキリストの体（血）である、と主張しました。聖餐において、キリストの体（血）がリアルに存在している（リアルプレゼンス）と考えたのです。それゆえ、ルターの聖餐論を「リアルプレゼンス（現臨、現在）説」と呼ぶこともあります。

いずれにせよ、神の言葉（キリストの言葉）を心に深く刻むことが大切です。その意味で、配餐の際に唱えられる聖書の言葉（「設定辞」）に耳を澄ますことが大事です。その時、キリストが「いまここで」リアルに私たちと共におられるのです。

最後にキリストの言葉を引用しましょう。《イエスは言われた。「わたしが命のパンである。……わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。》（ヨハネ福音書六・三五・五六）。（え）

シリーズ「人間ルター」Ⅻ

楽器を奏でるルター

高井保雄



モリッツ・ツェテター『ルター』(2016)より

現在教会で出版準備中の教会讃美歌増補ではルターが作ったコラール(会衆讃美歌)の全曲を掲載する編集方針だそう。

ルターは宗教改革の神学者の中では特に楽才に恵まれた人だった。詩篇の作者とされるダビデは豎琴の演奏でサウル王の気鬱を慰めたことが知られるが、ルターも自らの幽愁を癒すためリュートを奏でて美しい声で歌い、周囲から「良い音楽家」と呼ばれていた。

ヴォルムスの帝国議会の異端審問に召喚された時、対立するカトリックの神学者が、ルターが宿舎を始めあちこちでリュートで歌を演奏し、人々の耳目を集めた、と伝えている。

高名なニュールンベルクのマイスター・ジンガーのハンス・ザックス(一四九四―一五七六)はルターの同時代人だが、宗教改革の創始者たるルターを、歌で新しい一日の始まりを告げるナイチンゲールに喩えて『ヴィッテンベルクのナイチンゲール』という七〇〇行もの詩を書いた。

ルターにとつて「音楽は、美しく優雅な神の賜物で、自らを元気づけ、重荷を取り除いてくれる」ものだった。ルターは「音楽」と題する詩でナイチンゲールのことを次のように歌っている。

「……主なる神はナイチンゲールを
神与の歌い手、

音楽の名匠とすべく創られた。
主のためにナイチンゲールは歌い、飛び
昼も夜も、疲れを知らず、讃え歌う。

我が歌も主の栄光を誉め讃え、
永遠に主なる神への感謝を歌う……」

まさにルターは、中世の終焉、近代の黎明を告げるべく、ドイツの大地より翔し、新しい歌を世界に響かせたナイチンゲールだった。(JELIC引退牧師)

新刊案内

金子 晴勇

『宗教改革的認識とは何か』

―ルター『ローマ書講義』を読む―

(知泉書館、二〇二二年)

江口 再起



著者の金子晴勇氏は、戦後日本のルター研究を代表する一人である。氏の研究は、ルターを始めから特別視するのではなく、広く深く思想・学問世界全体の中で研究し、そうした中からルターの重要性を浮き彫りにする。まさに人文学の王道をいく。今年九〇歳になられたが、本書を六月に出版された。驚くべきことである。

氏の研究は多岐にわたるが、大きく二つの系列に整理することができる。一つはルター研究(『ルターの人間学』、『近代自由思想の源流』、『ルターとドイツ神秘主義』)。もう一つは人間学(『アウグスティヌスの人間学』、『ルターの人間学』、『マックス・シェーラーの人間学』)である。両者にまたがるのが、日本のルター研究の金字塔とも言える『ルターの人間学』(一九七五年)であるが、その内容が本書の土台をなしている。つまり本書によって、氏のルター研究の骨格を知ることができると言えよう。

さて本書の内容。ルターの神学的出発点は、修道院(大学)での初期聖書講義であるが、わけても『ローマ書講義』(二五―五〇)が重要。ここで明確になった「宗教改革的認識」がその後の改革運動の原動力となったのである。本書で詳述されるが、ルターはアウグスティヌスに学びつつ、彼がその中で育った中世神学(オッカム主義)を克服し、同時に神秘思想の真髄を受容することによって、その認識に到達した。それがいわゆる「信仰義認論」である。(評者「江口」)

なりの注釈をしておけば、もちろんここでのいう信仰とは、自ら義認(救い)を獲得しにいく自力的信念のごときものではなく、言うなれば神の恩寵が人に与えられる関係の中での信頼のことである。かかる信仰義認論の形成に至る歩みが、透徹した原典読解に基づいて、ルターが問題にした個々具体的な神学テーマに即して論じられていく。神秘主義の用語「拉致(ラプトス)」、「良心」、「フミリタス(謙虚)」、「義人にして同時に罪人」、「試練」、「愛の秩序」等々。圧巻である。

今後、ルターや神学を本気で研究したい者にとって必読書となると思う。

(ルター研究所長)

ルターの名著

『マグニフィカート』

〔正式名：マリアの賛歌 訳と講解〕

所員 石居 基夫

マグニフィカートとは、マリアの讃歌（ルカ二・四六～五五）のことであるが、ルターがその講解『マグニフィカート』を書いたのは、五〇〇年前、一五二二年のことである。ウォルムス国会が開かれた年である。主張を撤回するよう迫られたルターが、神の助けを求めつつ拒絶し、「我ここに立つ」と言ったのは有名な話だ。結果、ルターは皇帝より帝国追放を宣告されたが、ザクセン選帝侯フリードリヒによってワルトブルク城に匿われた。

実は、この前年に選帝侯にルターの保護を願っていたのが、ルターに尊敬の念を抱いていた選帝侯の甥、若きヨハン・フリードリヒであった。『マグニフィカート』はこのヨハンに献呈されている。ヨハンが、ルターにその講解を書いてほしいと願っていたのに応えてワルトブルク城で仕上げられた。

この背景を心に留めるとき、ルターがマリアの讃歌に、神の恵みの働きと、その恵みに生きるマリアの信仰とを聞き取り、



アルブレヒト・デューラー
『受胎告知』(1510年)

語っていることの意味深さを思わされる。ルターは恩人でありまた権力者である主君ヨハンに、「低き者が高くされ、高き者が低くされる」と歌うマリアの賛歌を説くのだ。

マリアは、伝統的にキリストの神性に對する信仰とのつながりの中で「神の母（テオトコス）」と告白されてきたわけだが、それに伴い神への救いのとりなしを担うものとされてきた。加えて、中世の教会がキリストを審判者として強調するにつれ、救いの仲介役をマリアに期待するようになる。しかしルターは、こうしたマリアへの過度な期待が、キリストから福音的役割を奪い取るものになってしまっていると批判する。しかしこの『マグニフィカート』は、そうした神学的議論が第一のことではない。知恵・力・富ではなく、憐れみ・公平なる裁き・義を求められる神のみ旨の確かなることが、むしろ慰めであり、喜びであることが、

貧しくされ、低くされ、捨てられ、苦しみの中に置かれた一人の女性、マリア自身の経験の中で賛美の歌となっているという。ルター自身が、破門と追放、貶め

新刊案内

江藤 直純

『ルターの心を生きる』

(リットン、二〇二二年)

多田 哲



日本福音ルーテル教会の牧師として、長らく神学校、大学で教鞭を取ってこられた江藤直純先生の最新刊本です。これまでの講演や論文をまとめたものや書き下ろしなどが収められており、内容も多岐に渡っています。

タイトルの「ルターの心を生きる」とあるように、単に過去においてルターが何を語った何をしようとしたことではなく、ルターが何を考え何を目指していたのか、そして、それが現代を生きる私たちにもたらすのかということ、筆

られる経験の只中で、聖霊の力を受けて神のことに生きる祝福を受けたことが重ねられているのだろう。
(ルーテル学院大学学長)

者は豊かな経験と深い思索によって描き出されています。ルター著作や言葉から、その人間観、教会論、全信徒祭司性について、キリスト者の自由について、礼拝論、社会倫理に関することを現代の私たちはどのように受け止め、またどのように日々の生活の場へ適用させていくかが分かります。

五〇〇年前のドイツで生きたルターという人物が、私たちの生き方にどう関係があるのか。それが分からないままルターの本をただ読んで聞いたりするだけでは空虚なお題目に過ぎませんが、筆者がこれまで牧師として歩んできた中で紡いできた血の通った言葉がルターの本をいきいきと語ります。それだけではなく、宗教改革五〇〇年を経たその先の未来へ向けての視座が提示されており、筆者の集大成といってもよいのではないのでしょうか。

さらに、ルーテル教会にとって重要な『小教理問答』と『アウクスブルク信仰告白』の解説もあり、今一度ルターやルーテル教会の要点を押さえておきたいと欲する皆さんにも推薦したい一冊です。
(JELC 日吉教会牧師)



J・S・バッハ

シリーズ

「ルターとバッハとわたし」



M・ルター

切り絵：小嶋三義

「バッハの所為？
いえ、おかげ様！」
〔ルターとバッハ〕研究部門
発足の辞〕

松本 義宣

退屈な音楽の授業中、居眠りする不届き者を壁から見下ろす、奇妙な長髪の厳めしい肖像画（これが当時の「かつら」だと知るのは大人になつてから）、それがJ・S・バッハとの最初の出会いでした。「音楽の父」とか呼ばれ、堅苦しさは倍増です（因みにヘンデルが「音楽の母」、子供になぜ彼が「母」かは疑問で、こちらは大人になつても不明？）。まさに敬して遠ざけたいバッハ、しかしやがて、自分の今に至る大切な存在となつてしまいます。

中学三年のある日、勉強逃避で音楽に目覚めた頃、FM放送での、既知の旋律ですが、なんとも荘厳な合唱曲が耳に止まりました。受難の賛美歌「血潮にそみし」（教会八十一）のメロディ、言葉も内容も何も分かんず、番組の終わりに「マタイ受難曲」と告知されます。牧師である父に聞くとバッハの作で、しかもルーテル教会の音楽家という程度の知識を得て、当時はまだ、信仰にも教会にも一片の興味も関心もないものの、

とりあえず町のレコード屋に行き、田舎のことゆえ選択肢はなく、カラヤンとかいう有名な指揮者の高価なLPアルバムを手に入れました（父に買わせたのですが！）。対訳を片手に、それから聞き入りました。内容がすぐわかつたわけではなく、ただひたすら美しさに魅せられていたように思います。そうこうするうちに、気が付くとバッハの他の曲にも触れ、コレクションが進み、付録の解説書等を読み進めて、バッハ先生が身近に、親しむものになります。マタイ受難曲の内容が分かるようになります、聖書語句、その敷衍としての自由詩、その応答としてのコラール（賛美歌）の配置、このパターンと発想が、まさに私の「説教」の手法となつていることに最近、はたと気づくことになりました。ただの音楽好きが、牧師にまなつてしまつた！ その一旦は「バッハの所為？」いえ、「おかげで！」と言わねばなりません。今後の課題は、ではそのバッハが、いかにルター先生の所為？おかげであの作品群に至つたのか、それを深く学ぶことです。併せて、「音楽家としてのルター」、そんな研究がないでしょうか？

（JELC 東京教会牧師）

マタイ受難曲との

出会い

加藤 拓未

ルターとバッハー私の場合、先に出会つたのはバッハでした。それは大学生のころの話。音楽好きの知人から「ペーター・シュライアー」というテノール歌手を勧められ、聴いてみようとなんげなく購入したのが、彼が指揮と福音史家を兼任している《マタイ受難曲》のCDだったので。

それまでバッハはおろか、クラシック音楽すら、学校の音楽の授業でしか聴いたことがないという有様でしたから、《マタイ》を聴いても、最初はまったくわかりませんでした。しかし、そこは若者の貧乏根性で、高価な国内盤のCD（三枚組で一万円）を無駄にすまいと、カセットテープに録音してウォークマンで通学時に毎日のように聴きました。すると、不思議なもので、少しずつ「いいな」と思うところが出てきたのです。今でも覚えていますが、最初に魅力を感じたのは冒頭合唱曲で、二群の合唱と二群の管弦楽が壮大な対話をくりひろげる箇所を

聴き、その迫力に「これはすごい音楽だ」と、さすがに気づいたのです。

それからは、毎日が発見の連続でした。つぎに気づいたのは、物語の要所で登場する四声のコラールです。コラールが登場するたびに、その清々しい響きに心癒されるような思いを覚えました。ところで「コラールとは何ぞや？」と素朴に思ったとき、書店で見つけたのが、長与恵美子という音楽の先生が書いた『コラールがあゆんだ道 ルターからバッハへの二百年』（東京音楽社、一九八七年）という本です。この本によつて、バッハの芸術の前提に、ルターが存在することを知りました。高校の世界史の授業で、ルターの宗教改革のことは習いましたが、私が本格的にルターに興味を覚えたのは、彼の音楽面での業績からでした。

その後、『マタイ』を聴きこむうちに、その内容や歴史的な背景を知りたいと思うようになり、私はバッハ研究の道を志すようになります。つまり《マタイ》と出会つたことで、私は、バッハ、そしてルターと出会つたのです。

（バッハ研究者、JELC 大森教会員）

ルターの ことば

所員 宮本 新

「信仰とは神の恵みに対する生きた、大胆な信頼であり、
そのためには千度死んでもよいというほどの確信である」

『ローマの信徒への手紙序文 (1522)』

今回の感染症で多くの人が経験した不自由をたどると「移動の自由」に行きつくことが指摘されている。感染症対策なのだから仕方がないとも思えるが立ち止まり考えた方がよいこともありそうだ。移動の自由こそが「原一自由」でありあらゆる自由の拠り所と考えられているからだ（大澤真幸）。移動が制限されるところ、集まること（集会の自由）もままならず、人間らしい交わりもまた制限を余儀なくされる。社会通念からみれば、人々がそれでも移動し、集い、声を上げる行為が気ままで自分勝手なこととみなされたとしても、なお注意深くあるべき理由は人間の自由の問題がここに潜んでいるからである。

ルターもまた移動の自由を著しく制限された体験がある。1521年4月、ウォルムスの帝国議会で「帝国アハト刑」に処せられ一切の法的保護の外に置かれることになった。究極の行動制限である。それから9カ月の間ワルトブルク城にかくまわれ、世間からは生死不明の扱いとなった。当然移動する自由などない幽閉生活である

が、そこでルターが何をしたかは注目に値する。新約聖書をドイツ語に翻訳、『九月聖書』の出版である。ここでもみ言葉への集中が果たされている。言うまでもなく、暇をつぶしたのでもなければ、たまった仕事を片付けたわけでもない。ルターにとってそれは不自由を突破する自由な行為であり、現にルターはそこで魂の自由を得ている。それが冒頭の引用にみられる神の恵みに対する大胆な信頼と確信である。移動の自由、言論の自由、そして集会の自由が制限されてもその人を支えなお自由にむかわせる魂の自由の在り処を物語っている。

ところでこの幽閉生活はヴィッテンベルクの騒乱によって突如終息する。周囲の反対を押し切りルター自らが騒乱の現場へ飛び込み8日間の連続説教で事態を鎮静化させるためであった。ルターの魂の自由とは神のことばにつながれた異次元の自由であったが別世界のものではなかった証左となる。

(ルーテル学院大学・神学校 専任講師)

今回はテーマに沿って、連載21回目のものを再掲する。マールブルクは、旧ヘッセン方伯の居住地である。テューリンゲンとの継承戦争を経てヘッセン方伯領として承認され帝国諸侯となった。8代目フィリップは1509年に13歳で君主となり、宗教改革陣営の教師から教育を受けたこともあり、この都市は早期に宗教改革陣営に属していた。

1520年代半ばからルターはスイスのツヴィングリとの聖餐論争に追われていた。ヘッセン方伯は宗教改革陣営の一体化を目論み、1529年、ルター派スイス派双方をマールブルク城に招き会談を行う。ルター派からはルターとメランヒトン、スイス派からはツヴィングリとエコランパディウスが立ち、3日にわたる会談の成果は『マールブルク条項』としてまとめられた。条項は15条からなり、14条までは一致を見るが、第15条聖餐については両者の主張を併記し、「キリストの真のからだと血が、そのままパンとぶどう酒の中にあるかどうかについては今一致をみないが、それぞれの心が常に悩むことのあるかぎり、互いにキリスト者の愛を示し、双方とも全能な神に対して、その霊によってわれわれのために、正しい意味をお証しくくださるようお願いしなければならぬ。アーメン。」と結ぶ。

紹介する切手は、1932年戦前ドイツ発行の慈善切手からマールブルク城を図柄にしたもの、1969年スイス発行のツヴィングリの肖像切手である。

切手に見るルター ③③

マールブルク

大分・別府・日田教会牧師 野村 陽一



牧師のためのルター・セミナー

(主題「コロナ時代の説教と聖餐」) 報告

所員 高村 敏浩

毎年初夏に開催されてきたルター・セミナー。昨年(二〇二〇年)は、コロナの世界的蔓延の影響を受け、春と秋にZoomを用い、数度にわたる講演や発題というかたちで変則的に行われた。コロナ禍の続く今年度は、オンライン上であったものの、時期は初夏(五月三日〜六月一日)に戻り、プログラムも例年と近いかたちで行われた。コロナ禍で、対面での礼拝や自由に歌うこと、聖餐にあずかることなど、これまでの当たり前がことごとく覆される中、悩みながら、ときに手探りで伝道・牧会を行っている牧師のためのセミナーにしようという意図から、特に葛藤の大きい説教と聖餐をテーマとし、JELCとNRKの現職と引退教師全員に参加を呼びかけた。一日目は約六〇名、二日目も約五〇名と、多くの参加があった。

プログラムの構成は、一日目にシンポジウムと講義①、二日目に講義②と全体討議。最初のシンポジウムは、「コロナの時代の説教」と題し、小泉基師、後藤由起師、神崎伸師がそれぞれ

の現場から報告と課題を提示した。続いて行われた立山忠浩師による講義①では、聖書とルターから「説教と聖餐」について学び、コロナ禍のコンテクストの中でそれをどのように受け止めて行くべきかを考えた。翌日に行われた講義②では、宮本新師が、コロナ禍に対してアメリカ福音ルーテル教会がどのように教会としての方針を出したかを紹介し、日本のルーテル教会のあり方についてのチャレンジを提起した。最後に、三つのプログラムで提示された課題などを共に話し合い、深める機会として全体討議の時間を設けた。

時宜にかなったテーマについて同僚同士で集まり話し合えたことに加え、例年に近い内容でセミナーを開催できたこと、オンラインのため初めての参加者が多くあったことは収穫であった。

(JELC 三鷹教会牧師)

研究所ニュース

コロナ感染が、まだまだ収まりません。一日も早く平安な日々がくることを、祈ります。

● 牧師のためのルター・セミナー
(五月三日〜六月一日)

テーマは「コロナ時代の説教と聖餐」。
八面上段の報告をごらんください。

● ルター研究所クリスマス講演会

「ルター『マグニフィカート』五百年」
本紙八面の下段の案内をごらんください。

● 献金のお願い

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金(二〇〇万円)と皆さんのご支援(約一五〇万円)で成り立っています。(二〇二〇年四月〜二〇二一年三月のルター研究所への指定献金は約九〇万円でした)。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金(ルター研究所)」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願いたします。

(所長 江口再起)

《ご案内》ルター研究所クリスマス講演会

“ルター『マグニフィカート』五百年”

今年は、ルターの珠玉の名品『マグニフィカート』五百年です。本紙五面をごらんください。例年、秋に開催してきましたルター研究所の講演会を、今年はオンラインでクリスマス季節12月12日(日)の午後に関きます。ぜひ、ご参加ください。

＝プログラム内容＝

- ◆ 講演「待つということー現代世界とマリア」(江口再起)
- ◆ シンポジウム(司会 石居基夫)

パネリスト

- ・滝田浩之「『マグニフィカート』の紹介」
- ・多田哲「ルターとマリア」
- ・安田真由子「聖書・女性・マリア」

*参加方法等は、各教会にお知らせします。

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三ー一〇ー一〇

電話 〇四二二一三ー一四六一

発行責任：江口 再起(所長)

e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp